

『かこのきょうしんななはかめぐり 賀古教信七墓廻』の上演年代について

谷口博子

一、はじめに

二、上演年代考証

1、作品の主人公及び主題

2、大内造営

3、賀古教信

4、『賀古教信七墓廻』の成立

三、結論

近松門左衛門作『賀古教信七墓廻』はいまだ、上演年代不詳の作品である。作品中には「義理」という語が五回も使われており、近松晩年の作品に集中する「義理」の意味を考えるためにも上演年代決定が必要な作品である。これまでに「現存本の版式から、一応、筑後掾時代のものとしておくのが穏やかであろう」（『近松全集』第九巻、岩波書店、昭和六十三年所収『賀古教信七墓廻』解題）という見解があり、本稿執筆中、平成十九年一月には井上勝志氏に「賀古教信七墓廻」の上演年代（『近世文藝』八十五号）が出たが、これらの研究も踏まえ、改めて上演年代の考証を試みたものである。

まず、作品中の「大内造営」と「宝永の大火」との関係の問題にし、次に題名の『賀古教信七墓廻』の「賀古教信」について考え、また綱吉時代に成立した融通念仏宗の隆盛を当て込んだ作品であると考証し、さらに本作は『和漢三才図会』を参考にしていとの検証から、上演年を正徳四年であると推定した。

一、はじめに

近松門左衛門作『賀古教信七墓廻』は、成立年代不詳の作品である。これまで、原道生氏、井上勝志氏らによって考証推定されてはいるものの、依然として明確にはなっていない。そこで本稿では、改めて『賀古教信七墓廻』の上演年代を考証してみたい。

原道生氏は、『近松全集』第九卷月報九（岩波書店、昭和六十三年九月）「竹本筑後掾の死」において、「従来、もっぱらその作風の古めかしさを指摘されることの多かったこの宗教譚的色彩の濃厚な異色作にも、反面、意外に新しい要素の混在も認められるのではないか」と指摘され、原氏自身の「やつし」の浄瑠璃化（『文学』第四十三巻六号、岩波書店、昭和五十年六月）を根拠に「近松の浄瑠璃諸作中でも、歌舞伎踏襲の作劇が大分手馴れてきた元禄中期以降の段階のものではないかという気もするのだが」と述べられる一方で、本作第三段における「その場の宮城野がそれとは知らずに我子の真光に盗みを唆すという経緯が『丹波与作待夜のこむろぶし』（宝永四年末か）中之巻の原型と見なされているのだから、その下限は自ずと定められてくるに違いない。」と述べられている。

次に、『近松全集』第九卷（岩波書店、昭和六十三年）

所収『賀古教信七墓廻』の解説では、「上演年末詳。竹本座。明和版『外題年鑑』には、元禄十五年七月十五日とあるが根拠不明。奥書に義太夫の名のある本があることから筑後掾受領以前とする説があるが、その奥書には疑問もある（『正本近松全集』第四巻解題）。現存本の版式から、一応、筑後掾時代のものとしておくのが穏やかであろう（『義太夫年表・近世篇』）。内容から盆興行であろう。」とある。

最も新しい考証は、井上勝志氏の『賀古教信七墓廻』の上演年代（『近世文藝』八十五号、平成十九年一月）であり、「本作の主要人物の一人である賀古川民部ノ省孝房」が「大内御造営」のため「かまぐらのさたとして」、「去年より在京」しているという序開きに注目し、「大内造営という設定は本作を貫く縦筋であると言ってもよいだろう」とされ、この「大内造営」は「宝永五年三月八日」の「前代未聞とも言うべき大火事により大内も炎上したため」であり、「この造営を当て込んで宝永六年に上演されたと見るならば、民部ノ省孝房が、大内御造営のため、宝永五年すなわち去年より在京しているという設定、また大内の御ふしんがその時点で大半成就しているという段階であるとの設定と、どちらとも合致する」と述べ、「宝永六年四月上演の可能性」を提示されている。次いで謡曲『土蜘蛛』や「源満仲翁簪」との影響関係、「のこくぶし」の取り

込み、大念佛寺の十菩薩来迎法要や『丹波与作待夜のこむろぶし』との関係、及び「大坂地藏巡り」との関連も推測されている。

本稿では、以上の諸論に対してさらに考証を加え、その成立時期を限定してみたい。

二、上演年代考証

1、作品の主人公及び主題

井上勝志氏は、前掲論文中、「一、大内造営」で、冒頭「賀古川民部ノ省孝房」を「本作の主要人物の一人である」、「大内造営という設定は本作を貫く縦筋であると言ってもよいだろう」とされ、「四、大念佛寺の十菩薩来迎法要」では、「法明上人と深く関わる教信上人を主要人物の一人に据えた本作が構想され、上演されたものではなかったか」と述べられたが、本作品の主人公及び主題については、今少し不明である。

稿者としては、そもそも作品の題名が『賀古教信七墓廻』であることや、本作の内容自体から、「教信という人物の生き方」そのものが主題になっていると考える。そして事実、次章以下で検討するように「賀古教信」という人物は本作の成立を考えるうえでも実に重要な意味をもっているのである。

2、大内造営

井上勝志氏は、「かまくら」の命による大内造営という設定から、歴史的事実としての大内造営に着目され、「宝永のそれが近松の時代に当たる」と結論された。近松が宝永の大火による大内造営を本作の題材として用いたという点においては、本稿も井上氏の見解に従うものであるが、しかしながら、本作の内容に即して検討するとき、井上氏のいう「この造営を当て込んで上演された」と見る」という結論はやや性急に過ぎる感が否めない。

まず井上氏と同じ方法で、大内造営に関する記述を例示すると次のようになる。

① 往日播州の惣郡代。鹿兒川前ノ令史藤原ノ教孝は。代々鎌倉の披官として家督民部ノ省孝房。(中略) 其比大内御造営かまくらのさたとして。諸国に是を下知らせらる則民部ノ省孝房は。熊野山の材木を引出せとの仰によつて。去年より在京有(第一段)

② (めのと子の印南の弥七郎) 大内の御ふしん大半成就いたせしが。陽明門の樗柱不足によつて君御舟を出されしに。先月七日のなんふうに熊野うらにて。いせんことくく翻溺に及びし。(第一段)

③ (継母の弟熊源太) いつはるな下郎め犬を入れて聞たるぞ。民部ノ省は遊女におぼれ御ふしん料を掠めおか

し。身の置所なきまゝに難風にうせしと偽り。欠落したると聞ける（第一段）

④（檢非違使）此流人は播州かこのさくはんと云者也。嫡子民部遊女におぼれ。大内造替の金子を掠め不行跡の余り。身は船中にてしせしと偽り行がたなし。是によつて父の令史を人質として遠流せらる。（第三段）

⑤（土民共）ばんしうかこのぐん主より。大内けん上のけやき柱の御通り。（中略）（庄屋）代々のお地頭の流人を歎き。惣百姓が金銀をあつめ。さくはん様の流人を申なだめ目出度御帰国遊ばし。其御礼にだいりぶしんのざい木。けん上いたし候（第四段）

以上、沙汰により大内造営があり、播州鹿兒川前ノ令史の嫡子民部ノ省孝房（第三段より教房）が、去年よりその任に当たっていたが、大内造替の金子を掠め行方不明となり、その罪咎により、替りに父の令史が人質として遠流となり、それを歎いた賀古の地の惣百姓が、金銀を集め幕府に許しを願ひ、目出度く郡主が帰国できたのである。

まず第一段で「かまぐらのさた」とは、諸国への「大内造営の下知」であり、大名である民部ノ省孝房への「熊野山の材木を引出せとの仰」であること、さらにその沙汰は「大内の御ふしん大半成就」の時点から見て「去年」に当たる。そこで、本作品はこれらの状況を満たす「大内造

営」であることについて、まず確認しておきたいと思う。

「かまぐらのさた」は「幕府の命」と推定され、『徳川実紀』『常憲院殿御実紀卷五十七』を検証すると、その頭書に「禁裏仙洞女院御所等造営助役」とあり、その本文には「宝永五年五月十四日」の記事として「○十四日有馬玄蕃頭則維は大内。松平中務大輔昌平。伊達遠江守宗賛。京極甲斐守高住。分部若狭守信政は仙洞。」などと、次々に大内造営の大名が「命ぜられ」ている。さらにこの記事をさかのぼると宝永五年三月十一日に、「この八日京油小路辺より火おこり。仙洞にうつり。大内。東宮。女院の御所どもことごとく炎上し。（以下略^②）とある。これは、江戸時代始つて以来最大の宝永の大火であり、その状況は、その後民間にも『寿福年代記』等の刊本や写本類に詳細に記されている^③。

「大内の御ふしん大半成就」を、この宝永度御造営の造営棟上げと見れば、それは、「京都御役所向大概覚書一」の「三」禁裏御構并御殿之事――「後書 右は宝永五年三月八日炎上ニ付、同六丑年七月廿五日御造営上棟有之^④」の記録から、大火の次の年の宝永六年七月二十五日頃のことになる。

以上、歴史的事実である宝永度御造営は、先に示した作品本文の大内造営の状況と一致していることが確認でき、

井上勝志氏の指摘通り『賀古教信七墓廻』の中の「大内造営」は「宝永五年三月八日の京大火による大内造営」と考えてよいものの、「大内の御ふしん大半成就」から、作品成立は、宝永六年七月頃よりあとであると推定できる。

ところで本作は、はたしてこの「大内造営に当て込んで上演」と考えてよいのだろうか。

『賀古教信七墓廻』では、大内造営をめぐる物語は、教房（孝房）を軸に教房が引き起こした事件をきっかけに展開しており、教房を始め周囲の人々が苦悩する作品で、問題を解決したのは「惣百姓たち」であり、教房やその周囲の人々ではない。つまり教房は、問題解決のためには何の働きもしていないのである。従って大内造営を題材として用いる意図はあつたにせよ、この話題自体はそもそも本作を構成するうえではその役割の一端になつてゐるに過ぎないといつてよく、かなり消極的な用い方である。一方、近松が、当代の事件を全面に押し出して当て込みをする場合には、事件に遭遇した人間の生き方など、それを作品の主題につながるような題材として効果的に生かすのが通例である。^⑤従って、大内造営を必ずしも本作の上演年と一致させる必要はなく、とくに上演年代を確定するうえでは、作品の主題にかかわるより上位の事実が想定できるなら、そちらを重視すべきであると思われる。

3、賀古教信

まず本文から、『賀古教信七墓廻』の「賀古教信」に関する記述を抜き出すと次のようになる。

①往日播州の惣郡代。鹿兒川前ノ令史藤原ノ教孝は。

代々鎌倉の披官として家督民部ノ省孝房。（中略）二

男は当奥御前の一子にて兄にをとらぬ侍ざかり。花二

郎教信と名乗て廿一。孝弟の心浅からず嫂は姉甥姪は

我子のことき仁愛に似ぬ母心ひすかしに。（第一段）

②誠に思へば一日に親の敵とあによめと。あたと情の

無常を見る是ぞ出離のちしきぞと。ぬいたる刀を取な

をしもとどりきつて教信の。文字を其まゝ教信法師と

かいみやうし。此みどり子はおいのとの我手にそだて

おぢおいの。つれ同心とだきあぐれば（第二段）

③（町の番太）かごの教信といふ道心此へんにはいく

はいし。ほうしやの為にあたひもとらず。旅人の荷物

を持チ人のかたをやすむる修行者。所の為に成ならば。

只やとはれて参らんと申（第三段）

④教信法師荷持チの人歩に立まじり。涙のひまに宮城

野とはそれと聞より立寄て。愚僧こそ民部どのゝ弟。

花二郎教信入道教信といふ者よ。去子細にて発心し旅

人の荷を持チほうかいのかたをやすむる願をたて。父

の流人としらずして此すがたを御らんぜよ。名乗て父

に思ひをかけなげきをかけんかなしきに。つゝむ心を
すいりやうあれ(第三段)

⑤(鉢たゞき) かこのけうしんおぢおいの。つれだう
しんと七はかを。よなくゝわくるつゆの間も。なき人
をくらぬよはとては。なむあみだ仏南無阿弥陀仏なむ
あみだ。(第四段)

⑥(地藏菩薩) いかに教信。おことがけんごの道心諸
仏のかんおうあさからず。今より汝が十念血脈受たる
もうじやは。往生疑ひ有べからず。是によつて真光法
師が。命をのべしやばにかへし。念仏の大だんなとな
すべしと我多ん王に請合たり。(第四段)

⑦若君(真光) は、(中略) 時をうつさず鹿児の庄に
伽藍をたて。教信上人ゑかうの導師ゑうせうのおい君
に。法明上人の号をさづけ北の方姫君の。拔苦与樂兼
ては又。沙界の含識平等利益。靈仏靈像安置して、百
福莊嚴百味の供物大念仏をかいひやく有。(第五段)

⑧(北の方) 有がたや教信上人朝暮のゑかうをさなき
法明上人の出家成就の功德によつて。親子もろとも九
品の上利に往生す。此結縁にひかれ継母の三毒三菩提
と成。卯ノ花迄も引撰す(第五段)

教信は、播州鹿兒川前ノ令史の二男で、先に登場した民
部ノ省孝房の異母弟であり、孝弟の心深く仁愛の人である。

親の敵と兄嫁の同日の非業の死をきっかけに発心し、兄嫁
北の方の死骸から生まれた赤子を我手に育てることを決心
し、つれ同心となる。そして、旅人の荷物を持ち人の肩を
休めるとともに、人々の往生を願ひ鉢たゞきをしながら七
墓を廻る。その道心は堅固で、それ故に地藏菩薩により、
賀古一族の往生と真光(兄の嫡子)の生き返りとを約束さ
れ、それにより蘇生した若君は、教信を導師に鹿児の庄に
伽藍を建て、大念仏を開白し、教信は、つれ同心の幼い甥
に法明上人の号を授け、賀古一族の往生が成る。

それでは「賀古教信」とは一体どのような人物なのだろ
うか。『賀古教信七墓廻』という作品が成立した背景を考
えることにしたい。

まず作品中、教信が自分の生き方を決意した時の言葉に
注目してみよう。教信は、第二段で発心の時「此みどり子
はおいのとの我手にそだておぢおいの。つれ同心」と決意
する。この後教信は、常にこの幼子と「つれ」でいて、物
語の大団円でもう一人の甥である若君が「大念仏をかいひ
やく」すると「法明上人」の号を授けた。ここに「賀古教
信」と「法明上人」という二人の人物の名号が明らかにな
る。加えて「大念仏をかいひやく」とあることから、本作品
は「融通念仏宗」という宗派と関係していることがわかる。

融通念仏宗とは、摂州大坂平野の大念佛寺を総本山とす

る宗派で、平安時代末に良忍を開祖とし、鎌倉時代の法明を中興の祖、江戸時代の大通を再興の祖とする。西本幸嗣氏「近世融通念仏宗における「御回在」と天得如来「御出向」について」(融通念仏宗教学研究所編『法明上人六百五十回御遠忌記念論文集』融通念仏宗総本山大念佛寺、平成十年)によると、融通念仏宗成立の基盤となったのは、室町時代末期から近世初期における融通念仏信仰(「大念仏信仰」ともいう)であり、その信仰形態は、村落又は地域単位で講組織や道場が存在したものと考えられ、元々は、中世における庶民信仰として大変盛んで、宗派にとらわれない信仰であった。大念佛寺も、始まりは挽道場であった。それが近世に入り組織化の動きが起こり、大通の努力で元禄元年幕府の裁許を受け、元禄十六年に融通念仏宗が成立する。このことは、『融通念仏宗年表』の元禄十六年「本山関係事項」に、次のようにある。

8・29 宗名を大念仏宗を改めて融通念仏宗とす

(大坂町奉行寺社方へ届出)(堺林昌寺史料)

即ち融通念仏宗の一宗成立であり、いっそう隆盛することになる。そしてその布教に使われた一つが「融通大念仏亀鐘縁起」という宝物であり、そこに「賀古教信」と「法明」という二人の人物が登場するのである。その内容は、『融通大念仏亀鐘縁起』「詞書」によると次のようである。⁸⁾

亀鐘かめかねは、鳥羽院愛用の御鏡を鑄直し良忍に下賜されたもので、代々相承され、後に石清水八幡宮の夢告で大坂深江の法明上人に渡され、上人は大念仏宗を再興する。その法明上人の夢に播磨の国賀古の教信房が現れる。上人は、その教信房の遺跡を訪ねるために難波の浦より船出するが、嵐に遭う。やむなく宝物の「鐘」を海中に投入すると海は静まり、上人は播磨の地に到着し、教信房の遺跡に至り回向する。

以下は省略するが、その時の遺跡が、現在の兵庫県加古川市野口町の念佛山教信寺法泉院に残る古墳跡であると伝えられている。⁹⁾

この融通念仏の法脈について、融通念仏宗前管長白井慈勲氏は、前掲記念論文集の序文「法明上人六百五十回忌の記念出版に際して」の中で、次のように述べられている。

融通念仏の法脈は六世良鎮上人のとき法嗣を失い、以来中絶のやむなきに至った。その間法灯は石清水八幡宮に預託されていたが、元亨元年十一月十五日、河内深江の法明上人によつてその法灯が受継がれ、融通念仏の法脈は実に百四十年ぶりに中興されたのであった。上人は六別時をはじめ各地に「講」をつくり、この念仏の勧進と庶民教化に全力をそそがれた。¹⁰⁾

『融通大念仏亀鐘縁起』は、法明について中世に遡る唯

一の資料であり、宝物の「鏡鐘^{かがみかね}」が「亀鐘^{かめかね}」と呼ばれるようになった重要な縁起である。「教信」と「法明」をつなぐものは、これをおいて他にないと思われている^②。そして総本山大念佛寺は、別名「亀鉦寺^{かめがねでら}」と言う。

以上、「賀古教信」とは、現在加古川市野口の念佛山教信寺の教信であり、『賀古教信七墓廻』という作品が成立する背景には融通念仏宗の隆盛があり、本作が当て込んだのは、この「融通念仏宗の隆盛」であつたと推定されるのである。

次に、『賀古教信七墓廻』の成立が考えられる宝永六年七月頃よりあとで、「融通念仏宗の隆盛」が明確になる年を『融通念仏宗年表』（前出）で検証すると、正徳四年の「本山関係事項」の中に次のようにある。

2・28 大通將軍家月光院へ融通天得如来の御事を記し奉る（清）

月光院は時の將軍家継の生母であり、天得如来は融通念仏宗の本尊である。そうするとこのことはとても光栄な大きな喜びであり、それには総本山の大念佛寺を中心に、大々的な布教があつたためと思われる。即ち融通念仏宗の隆盛の時であるということができ、この隆盛を当て込んで『賀古教信七墓廻』が制作上演されたのではないかと思うのである。

ここで井上勝志氏の言われる「宝永六年上演の可能性」を考えてみると、『融通念仏宗年表』（前出）には、宝永六年は「本山関係事項」に次の一文があるだけである。

1・10 將軍綱吉公薨去 大通東叡山に贈経焼香す（清）大通南都大仏殿の嘉会に請ぜられ導師となり親修（清）

即ち宝永六年は、一月十日に將軍綱吉が没した年である。大通は、遠く江戸に赴き東叡山に詣で、その他は東大寺大仏殿の落慶供養の嘉会に列しただけである。「本山関係事項」にはこの他何の記録もなく、「末寺関係事項」の覧は全く空白である。このことから融通念仏宗がこの一年間、総本山の大念佛寺から末寺に至るまで、一切行事を行わず、いわば宗を挙げて綱吉の喪に服したのではないかと考える。融通念仏宗にとって、宗門の再興は長年に亘る悲願であつた。それまで難航していた宗門再興の裁許が与えられたのが元禄元年、そしてその時の將軍がまさに綱吉であつた。元禄六年には、江戸城に招待され、大通は本尊の天得如来を奉持して登城している。そして元禄十六年、その將軍綱吉の治世下に融通念仏宗は一宗として成立したのである。このように融通念仏宗を認めてくれたいわば恩人ともいえる綱吉の薨去に当たり、宗として表だつた活動を控えているはずのこの年に、『賀古教信七墓廻』というような作品

が制作上演されたとはいかにも考え難い。

それでは近松は、何によって「賀古教信」の人物造形をしたのであろうか。近松は教信を、前述のように第一段冒頭で「孝弟の心浅からず嫂は姉甥姪は。我子のこととき仁愛」と具体的に人物設定をしている。また、第三段では教信自身が「去子細にて発心し旅人の荷を持ちほうかいのかたをやすむる願をたて。」と、自分の生き方を口にしていく。この傍線部の言葉は、その直前に町の番太が同じ言葉で次のように言っている。

かごの教信といふ道心此へんにはいくはいし。ほうしやの為にあたひもとらず。旅人の荷物を持ち人のかたをやすむる修行者。所の為に成ならば。只やとはれて参らんと申（第三段）

即ち同じ文言を繰り返して用い、近松はこれを教信の生き方として強調しているのである。

そこで近松当時に刊行されている一般的で手近な本で、賀古教信についての記述がある本を探してみると、『峯相記微考』と『和漢三才図会』がある。

まず『峯相記微考』は、中世播磨国の地誌で仏教事情などを記載した書物『峯相記』の注釈書であり、宝永二年姫路の書林井上源三郎より出版されており、その本文で教信

についての記述の中に次の一文がある。

旅人從荷負送糧物餉フ^①

ここには「旅人從荷負送」の後に「糧物餉フ」と続いております。賀古教信七墓廻^②で「ほうしやの為にあたひもとらず」（第三段）、「所の為に成ならば。只やとはれて参らんと申」（同）とある教信の生き方とは、明らかに異なる。しかも「仁愛」（第一段）という、教信の人間性を表す言葉も見られない。『峯相記』を見ても、その内容は同じである。従ってこれらの書に依ったとは考えられない。

次に『和漢三才図会』巻七十七播磨国を見ると「教信寺」の項目があり、次のようにある。

教信寺

在加古川與姫路之間

○教信者孝謙天皇時人姓祇或云南都興福寺住僧永西房弟子也於加古川釋舍北陸神菴常向西方称名念佛焉性喜仁愛救旅人之荷救其勞負觀八年八月十五日於完栗郡千草嶋爲盜賊殺其首以送教信之菴散葬於其地有墓於地建寺每年三月十五日僧徒多集會教信寺佛事念佛焉

釋書畧云攝州勝尾寺有僧名勝如貞觀八年一僧來敲門即迎入客僧曰我播州加古教信也因念佛力為今夜往生極樂也高僧必明年今月今夜必可往生也言訖化去時空中聞音樂果明年扶月某日勝如死

『倭漢三才圖会』巻七十七播磨国「教信寺」（新典社、昭和五十五年）

ここでは「教信ハ」に始まり「性喜仁愛」援「旅人之荷」救「其勞」とあり、ここに書かれた教信は、『賀古教信七墓廻』で「旅人の荷を持ちほうかいのかたをやすむる」(第三段)とある教信の生き方と同じであり、しかもその人間性についても、本作冒頭で「仁愛」(第一段と人物設定されたのと同じく「仁愛」とある。即ち、『賀古教信七墓廻』の中の教信の生き方を『和漢三才図会』の記述の中に確実

『賀古教信七墓廻』本文

① (鉢たゞき) かこのけうしんおぢおいの。つれだうしんと七はかを。よなくゝわくるつゆの間も。なき人をくらぬよはとは。なむあみだ仏南無阿弥陀仏なむあみだ。

(中略) にしへこそゆけなもふだなもふだ (第四段)

② (地藏菩薩) いかにか教信。おことがけんごの道心諸仏のかんおうあさからず。今より汝が十念血脈受たるもうじやは。往生疑ひ有べからず。(第四段)

(北の方) 親子もろとも九品の上刹に往生す。此結縁にひかれ継母の三毒三菩提と成。卯ノ花迄も引摂す (第五段)

③ 若君は、(中略) 時をうつさず鹿兒の庄に伽藍をたて。教信上人ゑかうの導師(中略) 大念仏をかいひやく有。

(第五段)

に見出すことができるのである。以上、近松は『賀古教信七墓廻』を書くに際して、『和漢三才図会』を参考にしていると考えて良いだろう。

教信の人物像が『和漢三才図会』の記述によって造形されているということは、右以外にも次のように対応する個所が見出されることによっても明らかであろう。

『和漢三才図会』本文

・常向西方^ニ称名念佛^ス

・我播州加古^ハ教信也(中略) 高僧^ハ必明年今月今夜必可^ニ往生^ス也(中略) 果明年某月某日勝如死

・於^ニ加古驛^ノ舍^ニ北^ニ結^ニ艸菴^ヲ

以下、『賀古教信七墓廻』の本文④から⑥と、『和漢三才図会』の本文について整理すると次のようになる。」「内は『和漢三才図会』の本文である。④は、出家後の教信の生き方であり、亡き人々の往生を願い、鉢たゞきをしながら七墓を廻るといふ、『賀古教信七墓廻』の教信を象徴する姿である。そこには「常向西方」称念佛」とある。

⑥は、二段に跨って物語の大団円に向かう所である。教信が信仰を強く持つ生き方が、諸仏の心を打ち、それ故に賀古一族の往生が成るが、それは、地藏菩薩が教信に告げ実現するという形で書かれている。「我、播州加古教信也（中略）高僧、必明年今夜必可往生也（中略）果明年某月某日勝如死」という個所と対応しており、それは「釋書畧云」とあるように『元亨釈書』巻第九感進四之一「勝尾寺證如」にある勝如の往生伝であり、教信が高僧（勝如）に告げ実現したとある。⑤は、物語の大団円であり、教信を導師に鹿兒の庄に伽藍を建てるという賀古一族の一大事業が書かれている。それは、「於加古驛舎北結艸菴」と、教信が加古の地に至り草庵を結んだ事実としてある。

このように主題である教信の生き方を見てゆくと、『和漢三才図会』の簡略な記事に見出すことができる。近松は、わずかの記事ながら『和漢三才図会』を参考にして『賀古教信七墓廻』を書いたのではないかと思う。

『和漢三才図会』は当時最大の百科事典で様々な知識の集成であり、「釋書畧云」とあるように、専門書の内容を広汎に包含する庶民的な本である。長友千代治氏は「近松と地誌」（『近世・上方浄瑠璃本出版の研究』東京堂出版、平成十一年）で、近松が世話物初作の『曾根崎心中』（元禄十六年五月初演）から、このように「一般的で手近な整版本」を使っていることについて述べられている。

他にも教信の人物像を伝える書物は、『日本往生極楽記』「二十二住僧勝如」、「往生拾因」、「今昔物語集」巻第十五「幡磨国賀古駅教信往生語第二十六」、「後拾遺往生伝」巻上「一七」撰津国勝尾寺証如、「元亨釈書」（前出）、謡曲『野口判官』や浄瑠璃『融通大念仏』（山本土佐掾正本）などがあるが、それらには『賀古教信七墓廻』で「旅人の荷を持ちほうかいのかたをやすむる」（第三段と書かれた教信の姿はなく、本作品の成立に直接の関係はない。ただし、浄瑠璃『融通大念仏』は、山本土佐掾正本で土佐掾と融通念仏宗の一宗成立の時期とが重なっており融通念仏宗が人々の中に浸透してきていること、内容は、融通大念仏中興の祖である法明を描いており、第一段に「ほうめい丸」と「が子のけうしん」という人物が登場し、けうしんがほうめい丸の前生として現れ、ほうめい丸を出家に導くことから、近松が『賀古教信七墓廻』を制作上演す

るヒントにはなっていたと考えられる。

4、『賀古教信七墓廻』の成立

ここまで考証してきたことから、『賀古教信七墓廻』の制作成立には、『和漢三才図会』が参考にされていることがわかった。

『和漢三才図会』には、刊記がなく、序文は「倭漢三才図会略序 正徳三年春三月下旬 朝散大夫大学頭藤原信篤識」、「和漢三才図会叙 正徳癸巳（三年）之年孟夏下浣前大医令和氣伯雄甫書」、「自叙 正徳二壬辰歲五月上浣法橋寺島良安書於 浪華杏林堂」、「和漢三才図会後序 正徳癸巳（三年）陽月中旬日 正三位大藏卿清原宣通誌」の四つがあり、成立は一番新しい序年である正徳癸巳（三年）陽月（十月）中旬以降と考えられることから、『賀古教信七墓廻』の成立も『和漢三才図会』成立の正徳三年（一七一三）十月中旬以降となる。一方、上演太夫は竹本筑後掾であるから、筑後掾没年の正徳四年（一七一四）九月十日までの間ということになる。

それでは、上演季節はいつのことか。外題に「七墓廻」とあり、七墓廻りの時節ということになる。そこで近世文学に書かれた七墓廻を見てみると、例えば貞享三年刊西鶴の『好色二代男』巻四の三「七墓参りに逢は昔の」では、

「三十六の夏、四月二日より、墨の衣に替へ」た男が「軒の風鈴の不落離と、日数の過るもよしなしと、無常野の焼場を隔夜してまはりけるに」と、夏の四月から七墓を廻っている。『賀古教信七墓廻』でも、教信がつれ同心の幼子と七墓を廻るのは、五月である。『俚言集覧』には、「七墓参・七月十六日の夜なり」とある。そうすると夏に始まり「盆」に至ることに思われる。

井上勝志氏は、前掲論文中「四、大念仏寺の十菩薩来迎法要」において、作品の季節を表す語や第四段冒頭の七墓廻の場面の標題が「夏野まよひ子」であることから「秋の季語となる七墓廻が設定されていることを根拠として盆興行とするのは、少なくとも本作においては妥当ではないと思われる。」とされ、さらに続く「鉢たゞき」の場面が五月のままであり、序詞にある「卯の花月」という語や中務秀光の妻の名が卯ノ花であることも、劇中の季節が三月から五月という設定と併せ、「四月上演の可能性」を提示されている。又途絶えていた大念仏寺の十菩薩来迎法要の執行が、宝永四年四月であることも傍証とされている。

しかしでは何故『賀古教信七墓廻』という題名がつけられたのか。近松の題名の付け方を見ると、例えば世話物最初の『曾根崎心中』から『心中宵庚申』に至るまで外題と作品の主題とは一致している。本稿では、これまで賀古教

信が主人公であり、教信という人物の生き方が主題であることについて述べてきた。七墓廻は主人公である教信の生き方である。つまり上演季節を考える時、主題である「七墓廻」ははずせないものである。そうすると『俚言集覧』から、「七墓廻」は普通一般には「盆」に行われていたのも確かであって、「賀古教信七墓廻」の上演も盆を想起させるのは確かであろう。

三、結論

先行研究を踏まえて検討した結果、『賀古教信七墓廻』の上演年代について本稿では、次のように結論する。

1、宝永の大火による大内造営を題材として用いており、その造営棟上げの日付から宝永六年（一七〇九）七月頃よりあとの成立と考える。

2、外題及び登場人物から、正徳四年（一七一四）の融通念仏宗の隆盛に当て込んだ作品と考える。

3、「賀古教信」の人物造形には、『和漢三才図会』巻七十七播磨国「教信寺」の記事を参考にしていると考える。

従って「賀古教信七墓廻」の制作上演年代は、『和漢三才図会』成立の正徳三年（一七一三）十月中旬以降、本作の太夫竹本筑後掾没年の正徳四年（一七一四）九月十日以前と考える。

4、以上から『賀古教信七墓廻』の上演年代は、正徳四年（一七一四）四月、もしくは盆前後であると考ええる。

ところで『賀古教信七墓廻』は、「義理」という語が五回も使われているにも関わらず、いまだ上演年未詳であり、近松浄瑠璃作品における「義理」を考えるためにも上演年代決定が必要な作品であった。義理が多出するからには近松後期の作品であろうと考えたうえでのアプローチであったが、これまでの考証の結果、正徳四年に定位することができた。正徳四年は、竹本筑後掾が没した年であり、近松にとっても転機となった年であり、この年に定位されたことの意味は大きい。これ以後晩年に向い近松の作品中に「義理」は増加、集中する。近松にとつての「義理」を考えると、義理の集中という観点は重要であり、今後は、その義理の集中から外れる作品である宝永七上演（推）の『吉野都女楠』、後期にはいり近松にとつて転機となった正徳四年上演の『賀古教信七墓廻』、さらには晩年に集中するそれぞれの作品における義理の考察によつて、近松浄瑠璃作品における「義理」の意味を明らかにしたい。

『賀古教信七墓廻』本文の引用は、近松全集刊行会編『近松全集』第九巻（岩波書店、昭和六十三年）による。

本文引用にあたっては、旧字体の漢字は適宜現行の字体

に改めた。又傍線部はすべて稿者による。

注

(1) 新訂増補国史大系第四十三巻『徳川実紀』第六篇(吉川弘文館、昭和四十年)。六九六頁に次のようにある。

「○十四日有馬玄蕃頭則維は 大内。松平中務大輔昌平。伊達遠江守宗賢。京極甲斐守高住。分部若狹守信政は 仙洞。女院。京極若狹守高或は 院中。木下肥後守台定。池田内匠守政倚は 中宮の營築助役。伏見奉行建部内匠頭政字は 大内の普請奉行。使番山岡遠江守景軌。三島清左衛門政興は 仙洞。女院の普請奉行。使番成瀬吉右衛門正起。伊丹覺左衛門勝友は 中宮の普請奉行仰付られ。小姓組春日内蔵助行條。小笠原七左衛門長晃。書院番大久保基右衛門忠位は。これに加はり勤むべしと命ぜらる。」

(2) 同注1、六九〇頁参照。

(3) その写本の一つに、次の記事がある。

長友千代治氏蔵失題写本

「宝永五戊子年三月八日京都 大火午ノ下刻油小路姉小路下町 西側二軒目より出火坤方魔風 烈敷吹 内裏炎上其外七御所 公家之享宅九拾四軒其炎飛テ 下鴨河合社炎上并在家四拾余軒 又風変テ南江焼行翌九日未下刻 油小路三条二而焼止ル(以下略)」

(4) この内容は、宝永度御造営時に普請した内裏の御構や御殿などの名前と場所とその状況の記録である。岩生成一監修『京都御役所向大概覽書』上巻(清文堂史料叢書第五刊、清文堂、昭和四十八年)参照。

(5) 長友千代治氏は、「大地震の年の浄瑠璃界と近松」(『近世・

上方浄瑠璃本出版の研究』東京堂出版、平成十一年)において、「種々の事件を当て込んですぐに取り入れる趣向は、観客を納得させる要因になる。けれども、近松は自然災害や社会経済制度の変革そのものには大して関心は示さず、それよりもその中で人間関係に大きな興味を示すのである。(中略) 近松の関心事は、事件に遭遇した人間が、追いつめられた状況の中で、どう問題に対処し、解決するかにある。『曾根崎心中』でも、『心中重井筒』でも、問題を背負い、出口を探して、苦悩する男女の心情を描いているのである。」と述べている。

(6) 融通念仏宗の一宗成立の前段階の信仰形態については、西本幸嗣氏の本稿に引用した論文中に詳細な考証がある。西本幸嗣氏によると、それは法明上人を開基とする「別時」という信仰的講集団であり、別時とは、「別時地域」内の講中のなかで籤を引き、引き当てた講中の居室に「寺号(道場)」、「本尊」が移動する信仰形態で、それを「挽道場」といった。つまり大念仏寺の住持が選出され、代わっていったのである。

(7) 融通念仏宗教学研究所編『融通念仏宗年表』(融通念仏宗総本山大念仏寺、昭和五十七年)は、大念仏寺所蔵の多くの古文書、又大通上人以後昭和に及ぶ百余冊の膨大な日鑑等の史料に加え、詳細綿密な調査による新史料を加えて編纂されたものであり、末寺の動向を含めた全教団の構想の下に編纂された総合年表である。宗祖良忍上人誕生の十一世紀七十年代より、新政府により一宗独立の公認を得た明治七年までの記事が収められている。この年表によれば、融通念仏宗の一宗成立過程は、次のようである。

「貞享元年(一六八四) 良観、大通と協議し、宗門再興の

願書を認めて江戸に下り、寺社奉行酒井河内守戸田能登守に差し出す」とあり、その四年後「元禄元年（一六八八）宗門再興の幕府の裁許を受く（寺誌）大通帰山」とある。そして元禄六年（一六九三）には、大通は招待され、四十六世上人として本尊の天得如来を奉持して江戸城に登城している。天皇家からは、元禄七年、先帝靈元天皇より紫衣を賜り、元禄九年、東山天皇より香衣を賜る宣旨があり、又壇林設置の許可をもらう。そして宗門再興の願書を認めて江戸に下ってから十九年後の元禄十六年（一七〇三）にやっと融通念仏宗が、一宗として成立している。同年表元禄十六年の「本山関係事項」に次のようにある。

山主 大通 大通上人融通門印章一卷を撰述す（三略・尊略・寺誌）宗法両脈の付属及び円頓戒壇を復興し儀始めて定まる。

8・29 宗名を大念仏宗を改めて融通念仏宗とす（大坂町奉行寺社方へ届出）（堺林昌寺史料）

(8) 『融通大念仏龜鐘縁起』は、伊藤唯真氏監修『融通念仏信仰の歴史と美術—資料編』（融通念仏宗教学研究所編、東京美術、平成十二年）に全編掲載されている。又『同一論考編』所収、松浦清氏「融通念仏の三縁起絵巻」参照。

(9) 念佛山教信寺には、現在の「教信上人の墓所」のほかには法泉院に「教信上人廟古墳跡」があり、念佛山教信寺貫主兼務法泉院第二十一世住職長谷川慶悟師によると法泉院に残る「教信上人廟古墳跡」が、当時法明上人が回向した教信の遺跡だとのことである。長谷川慶悟師編『播州賀古の郷土史物語』—駅家邸人沙彌慶明論考集—（念佛山教信寺塔頭「法泉院」発行、平成十八年）にも、「元亨三年 法明坊と念仏聖

の教信墓参りの段」（大念仏寺所蔵 良忍・法明両上人絵伝軸より）と並べて写真掲載されている。

(10) 横田兼章氏「あとがき」（融通念仏宗教学研究所編『法明上人六百五十回御遠忌記念論文集』大念佛寺、平成十年）にも、融通念仏の宗系や信仰などについて記されている。

(11) 法明の資料については、融通念仏宗前管長白井慈愍氏は、本稿で本文中に引用した前掲記念論文集（大念佛寺）の序文「法明上人六百五十回忌の記念出版に際して」の中で、本文引用部に続いて「このような輝かしい業績を残された上人であつたが確固たる資料にもとづく古文書、記録の類は殆どなく、従来法明上人伝といえば『龜鐘縁起』『阿祖師絵史伝』『三祖略伝』の範囲を出るものはない。しかし古文書、記録の類はなくとも上人の行歴は庶民の口碑や伝承の中に脈々と生きつがれており、その遺跡も各地に散在している。」と述べている。さらに、同記念論文集所収、戸田孝重氏・横田兼章氏「法明上人伝の研究」に詳細な考証がある。

(12) 『融通大念仏龜鐘縁起』、『法明』、『教信』の關係については、行昭一郎氏「融通大念仏龜鐘縁起」と法明伝承について（注10記念論文集）に詳しい考証がある。

(13) 融通念仏宗の宗門再興の願いが難航していたことは、『融通念仏宗年表』（前出）の「本山関係事項」に次のようにある。「貞享二年（一六八五）大通宗門再興を幕府に働きかけるため江戸にとどまる」「貞享四年（一六八七）大通、出府し宗門再興のことを計るも難行」。

(14) 剣持源清詮書『峯相記微考』井上源三郎刊、宝永二年参照。なお引用は、神宮文庫蔵本による。

(15) 長友千代治氏は、「近松と地誌」で、『曾根崎心中』の「観

音廻り」での地誌の使い方について次のように述べている。

「『曾根崎心中』の『観音廻り』は『難波雀』『難波鶴』で礼所がたどられ、縁起は新しい資料の『摂陽群談』によった。それを浄瑠璃で歌謡形式にしたのは延宝六年（一六七八）初冬刊『難波芦分船附録』の様式、『大坂より方角の哥』『大坂惣堀并橋数名知哥』『〇町中名寄の哥但しりしがし』のように、覚え易くする趣向だったのではないか。（以下略）。」

『中難波雀』は延宝七年（一六七九）三月刊、『難波鶴』は同年七月刊の大坂案内であり、『摂陽群談』は元禄十四年刊の摂津国の地誌である。

- (16) 山本土佐掾は、浄瑠璃太夫「山本角太夫」の受領名。角太夫節を創始した。没年は元禄十三年（一七〇〇）か（正徳二年（一七一二）説もある）。大坂で伊藤出羽掾を師とし、出羽座の実力者岡本文弥の影響を受けた。京都において、延宝五年までに、天下一若狭藤原吉次の名代で一座を立てる。しかし移動興行も多く、興行・曲節において大衆受けの努力があった。延宝五年閏十二月十日受領して相模藤原吉勝と称し、のち土佐掾藤原孝勝と改める（信多純一によると、貞享二年（一六八五）九月二十三日以後間もなく）（竹内誠・深井雅海編『日本近世人名辞典』吉川弘文館、平成十七年参照）。

- (17) 融通念仏宗の一宗成立年代を、大通が宗門再興の幕府の裁許を受けた元禄元年（一六八八）から、元禄十六年（一七〇三）八月二十九日の大坂町奉行寺社方へ届出（宗名を大念仏宗を改めて融通念仏宗とす）までと見れば、山本角太夫が土佐掾を受領した貞享二年（一六八五）から元禄十三年（一七〇〇）に没するまでの年代と重なる。注7参照。浄瑠璃『融

通大念仏』の上演は、外題年鑑では「宇治加賀掾嘉太夫並門弟衆の分」のところに記載されている。上演年は記載されていない。河竹繁俊編『浄瑠璃研究文献集成』北光書房、昭和十九年所収「外題年鑑」参照。

- (18) 浄瑠璃「融通大念仏」の内容は、深江の左衛門の一子ほうめい丸が出家し、大坂平野の大念仏寺の中興開山となるまでを描いている。

第一段、深江の法明上人御出家の因縁。「か子のけうしん」が「ほうめい丸」の「ぜんしやう」として現れ、いいなすけの「津の国ひらのゝしやう、ふくはらぢぶの大夫とみたかのそく女、玉藤姫」への執心・愛欲に迷うほうめい丸が出家に導く。第二段、第三段、玉藤姫のこと。第四段、玉藤姫の死とほうみやうのこと。第五段、ほうみやうが平野大念仏寺の中興開山になる。天筆の三尊絵像の因縁。（古浄瑠璃正本集刊行会編『古浄瑠璃正本集・角太夫編』第三、大学堂書店、平成六年参照）。

- (19) 村田了阿編輯、井上頼国・近藤瓶城増補『増補俚言集覧』皇典講究所印刷部、明治三十二年。

「七墓参 大坂にて宵かゝり夜の明るまでに寺を七ヶ寺参る三味線太鼓にて参る七月十六日の夜なり初まりはいつかたをやおはり八天王寺に詣るとなり」

『付記』 本論考は、二〇〇七年二月三日佛教大学大学院国文学専攻通信学合同基礎発表会での口頭発表をもとに、加筆訂正したものである。要約に記したように、井上勝志氏の論文に触発されたのではなく、その時点で既に素稿は出来上がっていたことを断っておきたい。席上、御教示を賜りました先

生方、参加者に厚く御礼申し上げます。また、念佛山教信寺貫主兼務法泉院第二十一世御住職長谷川慶悟師、融通念仏宗総本山大念佛寺宗務総長吉村暉英師に一方ならぬ御教示を受けました。心から御礼申し上げます。

成稿後、上田伸一氏に御意見を求めたところ、井上勝志氏には近松応援団機関誌『さえずり』に「身近に近松―『賀古教信七墓廻』をめぐる―」の連載があることを教えていただいた。但し、現在まで本稿の主旨と関係するところはないようである。御礼申し上げます。